音楽学部
人文学部／人間発達学部

2022年度推薦入試問題　国語

●時間／140分
●配点／5000点（音楽学部推薦）
5000点（人文学部奨学生推薦）
5000点（人間発達学部）
6000点

一　次の文章は、明治の文豪、森鴎外[注1]の娘が父の思い出を書いた、「父の帽子」という随筆である。文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

①小さな怒り

私の父は頭が大きかったので、普通の人の帽子を見馴れた眼で父の帽子を見ると平たく、横に大きい感じがして独特で、あった。私は父についてよく帽子屋に入った。

番頭[注2]が出して来る帽子はどれも父の頭には小さかった。「もう少し上等の分を見せてくれ」[A]と父が言った。「上等の分」という言葉は番頭には直ぐには分からなかったが、意味が解ると、番頭の顔には薄ら笑い[B]が浮かぶのであった。奥から出して来る帽子も、父の頭には嵌らなかった。番頭達は人並み外れて大きな頭の人を、笑いを耐えたような顔で、眺めた。灰色の単衣[注3]を着て、薄茶の献上[注4]を下手に結び、太いステッキをついている父はカイゼル皇帝[注5]が浴衣を着たというようで、奇妙であったし、態度や言葉もふつうの人と少し違っているので、彼等にはどんな人なのか全く解らなかった。それで彼等は田舎から出て来たお爺さんだろうと定めてしまうらしかった。父はそういう番頭達に対していつも深く腹を立てていた。そうしてその怒りは母なぞが不思議に思う程ひどかった。（父は普通、人がどうでもいいと思うような小さな事に、深く腹を立てる人であった。相手は電車の車掌、精養軒[注6]のボオイ[注7]、車夫[注8]、店員なぞで、父が怒るのは彼等が父を田舎のお爺さんのように扱う時、又は料理の名を英語で言って解るまいという顔をする時なぞで、あった。父は直ぐに正しい英語で命じ直したり、又或時には、目的地に着かないのに俥[注9]を下りて歩いたりした。）

そういう風[C]にして何軒も帽子屋を廻って歩いて、父は自分の帽子を見つけるのであった。

私は今でも、その平たくて横に大きい父の帽子が眼に浮かんで来て、懐かしくてならない時がある。父が死んだあとで一度、私は父の帽子に会ったような気がしたことがあった。夫の友達の一人に父のような所のある人があり、その人の頭は父ぐらい大きいので、脱いで置いてある帽子を見ると、私はその帽子に父を感じた。鉄色に同じリボンの帽子、であった。（その人は私と息子との共通の、尊敬する人物の一人である。）その帽子を見てからあと、私は父の帽子に会っていない。[D]

②大きな怒り

私は幼い時からそばにいて父を見ていて、私には父が、学問や芸術に対して、山の頂を極める人のような、きれいな熱情を持っていた人のように、見えた。私は時々父に解らない字や、仮名遣いをきいたが、そういう時私はいつもは大好きな父が、いくらか嫌いになるのであった。それは父の字や仮名遣いにたいする、異様に烈しい心が感じられて、それがうるさく思われたからで、あった。私に教えてくれようとしている優しいようすの中にも、父のまるで怒ってでもいるような烈しい心がひそめられていて、それが私にうるさい感じをあたえたので、あった。父は眼に見えない「嘘字」や「仮名遣いの間違い」という敵に向かって怒っていて、それが幼い私にも伝わるので、あった。「パッパ、もういいわ」そう言って私が本を持って行こうとすると、父は、「まあ、待て、待て、」と言って止めるので、あった。そんな時の記憶が父の想い出の中に混って、私の頭に強く残っていたのだろう。十七になって夫と欧羅巴を歩いた時、私は[E]いろいろな場所で「父の心」に会ったように、思った。シルレル[注10]、ゲエテ、ストリンドベルヒ、なぞの字が鈍い金色に光っている、伯林の本屋の薄闇の中に立っているような時、そんな時なぞに私は「父の心」が其処にいるように、思った。私は父の、もっと極めたくて極められずに死んだ、学問への「心」が、暗い本棚のあたりに漂っているのを感じ、稚い頭の中で、父の一生を考えてみるのだった。烈しくて、さかんな、そのために寂しかった父の一生を、私は想ってみるので、あった。ミュンヘンの町で、家にあった花と同じな花を見たり（父は独逸から花の種を持って帰って家の庭に植えていた。）町の角で、父によく似た独逸人を見たりする時、父の懐かしさは花の匂いのように私の心をかすめた[F]

が、私がひどく切なくなるのはそういう、父の心に会ったような気がする時で、あった。

私は帽子を貰う時の父のような、つまらない事に怒る父が大好きであるのと同じように、私に仮名遣いを教えた時のようにして、議論をしたり、反駁（はんばく）する文章を書いたりした、怒っているような父を、いつからかひどく好きになって来ている。

森の中で、たてがみを立てて咆哮（ほうこう）する一匹の獅子（しし）が私の眼には見えていて、父の肖像（しょうぞう）の眼の中にその獅子がいるのを見る時、私はどれだけ父を好きだか知れない自分を意識するのがいつものことで、あった。

（森茉莉「父の帽子」による。）

注

1　森鷗外……一八六二～一九二二。明治時代を代表する小説家。ドイツへ留学後、西欧文学の紹介や翻訳、小説・評論の執筆を行う。一方で、陸軍軍医として軍医総監、医務局長などの役職を歴任した。代表作に『舞姫』『雁』『高瀬舟』などがある。

2　番頭……商店の商売をとりしきる雇人。

3　単衣……一重で仕立てられた着物。夏に着る。

4　献上……博多織の着物の帯で、最上品をいう。

5　カイゼル皇帝……ドイツ皇帝のこと。特に、ドイツ帝国第三代皇帝、ウィルヘルム二世（一八五一～一九四一）を指す。両端がはねあがった特徴的な口ひげをはやしており、「カイゼルひげ」と言われた。

6　精養軒……東京上野にある洋食レストラン。

7　ボオイ……レストランに勤めるボーイ（ウエイター）のこと。

8　車夫……人力車をひく人のこと。

9　俥……人力車を表す漢字。

10　シルレル、ゲエテ、ストリンドベルヒ……西欧の文学者たちの名前。

問一　傍線部A「もう少し上等の分を見せてくれ」とあるが、この場合、「上等の分」とはどのようなものか。説明しなさい。

問二　傍線部B「薄ら笑い」と同じ意味の熟語として、最も適当なものをア～エの中から選び、符号で答えなさい。

ア　大笑　　イ　苦笑　　ウ　微笑　　エ　冷笑

問三　傍線部C「そういう風」とは、どのような様子か。説明として、最も適当なものをア～エの中から選び、符号で答えなさい。

ア　本来は高名な作家であり軍医でもあるのに、わざと上等な着物を奇妙な感じに着て、態度や言葉もふつうの人と違った感じにふるまい、店員たちに田舎から出て来たお爺さんに思われるようにしている様子。

イ　帽子屋で番頭にばかにされるようなふるまいをされたあとは、電車の車掌、洋食レストランのボーイ、人力車の車夫、店員など、ありとあらゆる職業の人の、ちょっとした対応の悪さにあたり散らして怒っている様子。

ウ　洋食レストランのボーイや人力車の車夫がばかにしたような態度をとった時に深く腹を立てて、正しい英語で命じ直したり目的地に着く前に下りたりしたように、失礼な対応をした店員に怒りを表明している様子。

エ　帽子屋で番頭が出して来るような普通の人の帽子のサイズは、小さすぎるため、番頭に嫌な顔をされても何度も帽子を持ってきてくれるように頼んで、気に入った帽子が見つかるまで探そうとしている様子。

問四　傍線部D「私は父の帽子に会ったような気がしたことがあった」とあるが、なぜ「父の帽子に会った」という言い方をしているのか。説明として、最も適当なものをア～エの中から選び、符号で答えなさい。

ア　人並みはずれて頭の大きい父の帽子は、父の特徴や性格をよく示した懐かしい品であり、そのような帽子を見ると父を感じるから。

イ　作者は亡くなった父のことを大変尊敬しており、たとえ帽子であっても父を思い出させるようなものであれば何でも大事だと考えるから。

ウ　父の帽子は特別注文して作らせた特殊な形をしていて、父の帽子以外でこのような帽子を見つけることができないとあきらめていたから。

エ　作者は尊敬する父が亡くなってから少しでも父に似た部分のある人を探し求めて会いたいと思っており、やっと父と帽子の形のよく似た人を見つけたから。

問五　傍線部E「そういう時私はいつもは大好きな父が、いくらか嫌いになるのであった」とあるが、それはなぜか。理由を書きなさい。

問六　傍線部F「私はいろいろな場所で「父の心」に会ったように、思った」とあるが、この場合の「父の心」とはどのようなものか。具体的に述べた箇所を文章中から二十字以内で書きぬきなさい。（句読点・記号を含む）

問七　（1）二重傍線部①「小さな怒り」とはどのようなことに対する怒りか。くわしく説明している箇所を文章中から二十一文字で書きぬきなさい。（句読点を含む）

（2）二重傍線部②「大きな怒り」とあるが、この怒りとは、何に対する、父のどのような態度によるものか。説明として、最も適当なものをア～エの中から選び、符号で答えなさい。

ア　字や仮名遣いに対して、もっと極めたいという果様にはげしい情熱をもっていて、「嘘字」や「仮名遣い」の間違いをいっさい許そうとせず、たとえそれらを間違えた相手が我が子であっても許そうとはしなかった態度。

イ　本当はもっと留学先のドイツで学問を極めたかったが事情により途中で断念して帰国せざるをえず、そのために学問への情熱を捨てきれないで、我が子には自分のようになってほしくないという気持ちから厳しく勉強を教えようとした態度。

ウ　「嘘字」や「仮名遣い」の間違いをしても平気な学者や作家に対して、学問に真剣に向きあおうとしない姿勢を感じ取り、同時代の文壇に対する絶望を感じながらもあきらめないで彼らと議論をしたり反駁しようとしたりした態度。

エ　学問や芸術に対して、もっと極めたいという純粋な情熱から、たとえ文字や仮名遣いの誤りであっても真面目に向き合い、そのような姿勢から学問・芸術上の問題には議論をしたり反駁の文章を書いたりもした態度。

問八　傍線部G「森の中で、たてがみを立てて咆哮する一匹の獅子が私の眼には見えていて、父の肖像の眼の中にその獅子がいるのを見る時、私はどれだけ父を好きだか知れない自分を意識するのがいつものことで、あった」とあるが、作者はそのような父の生涯をどのようなものとしてとらえているか。説明として、最も適当なものをア～エの中から選び、符号で答えなさい。

ア　穏やかで優しい中にも、ささいな誤りも許さない厳格な態度を保ち続けて、不正にいどみ続けた生涯。

イ　誇り高く、自分が極めたいものに対して純粋な情熱を持ち続け、そのために孤独でもあった生涯。

ウ　社会から理解されず孤独だったが、それでも自分の信念を曲げず主張をし続けた生涯。

エ　留学時の若い頃から持ち続けた近代国家の理想を忘れず、あらゆる封建制の矛盾と戦い続けた生涯。

二　次の問いに答えなさい。

問一　①～⑤のカタカナの漢字を、ア～シの中から選び、符号で答えなさい。符号は一度だけ選択すること。

①　講師の話を、ケイ聴する。

②　祖父が、お店をソウ業している。

③　百貨店のサン下に入る。

④　汚れを落として、靴ズミを塗る。

⑤　焼き物を、カマから出す。

ア　釜　　イ　傘　　ウ　炭　　エ　傾　　オ　操　　カ　賛

キ　敬　　ク　創　　ケ　参　　コ　墨　　サ　携　　シ　窯

問二　①～⑤の熟語の□中に正しい漢字一字を入れて、四字熟語を完成させます。それぞれ正しいものをア～エの中から選び、符号で答えなさい。

①　□猛果敢　　ア　優　　イ　悠　　ウ　雄　　エ　勇

②　千□一遇　　ア　載　　イ　彩　　ウ　栽　　エ　災

③　厚顔無□　　ア　致　　イ　恥　　ウ　知　　エ　地

④　新進□鋭　　ア　気　　イ　希　　ウ　喜　　エ　寄

⑤　鶏□牛後　　ア　校　　イ　考　　ウ　口　　エ　光

問三　①～⑤の熟語の類義語を、ア～コの中から選び、符号で答えなさい。符号は一度だけ選択すること。

①　計略　　②　采配　　③　怪我（けが）　　④　背骨　　⑤　瓦解

ア　損傷　　イ　指揮　　ウ　助言　　エ　企画　　オ　誤解

カ　脊柱　　キ　負傷　　ク　鎖骨　　ケ　壊滅　　コ　策謀